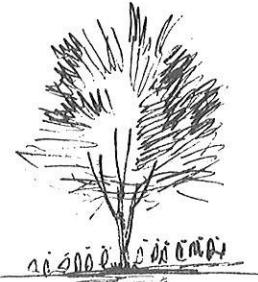


ひかりのこ

光の子



No.148 2011.6.10

●年間聖句 光の子として歩みなさい。(エフェソの信徒への手紙 5章 8節)



「あじさいに見つけたよ」

挿絵・中島由起子

「繩電車」

春めくや厨に母の愚痴増えて

じやんけんのあひこが続き山笑ふ

片ゑくぼ生まれて消えて風光る

満開の桜に明日を疑はず

春愁や待てずに返す砂時計

会ひたくて躊躇し小石も隠めく

薰風や指笛に発つ繩電車

俳人 篠山 まどか

ひかりのこ

東日本大震災という未曾有の災害について、その端の方で、私も実際に遭遇したのだが、私がそれまでに聞いた大地震は、関東大震災のことであった。何でも、母が、産まれたばかりの赤ん坊を抱えて、外へ転び転び逃げ出したという話、そして、夜は恐ろしさのあまり、竹やぶの中に蚊帳を吊つて寝たということも、そして、近所の家が何軒かぶれてしまつたということも、何度も聞かされたものである。

しかし、この関東大震災というものについては、その恐ろしさを想像するだけであった。

それでも、何度も大きな地震に遭うと、いつも関東大震災との比較で語られるのであつた。「あの時は、とてもこんなのは違つて恐ろしかつた。歩くことも立つていることもできなかつた。」と。

しかし、今回の東日本大震災は、それを上まわる大きなものだつたようである。

私は、或る程度の大きな地震に遭うたびに、いつも思い出すことがある。

彫刻家 中島 瞳雄

東日本大震災という未曾有の災害について、その端の方で、私も実際に遭遇したのだが、私がそれまでに聞いた大地震は、関東大震災のことであつた。何でも、母が、産まれたばかりの赤ん坊を抱えて、外へ転び転び逃げ出したという話、そして、夜は恐ろしさのあまり、竹やぶの中に蚊帳を吊つて寝たといふこと、そして、近所の家が何軒かぶれてしまつたといふこと、いつも聞かされたものである。

しかし、この関東大震災というものについては、その恐ろしさを想像するだけであった。

それでも、何度も大きな地震に遭うと、いつも関東大震災との比較で語られるのであつた。「あの時は、とてもこんなのは違つて恐ろしかつた。歩くことも立つていることもできなかつた。」と。

しかし、今回の東日本大震災は、それを上まわる大きなものだつたようである。

私は、或る程度の大きな地震に遭うたびに、いつも思い出すことがある。

彫刻家 中島 瞳雄

東日本大震災という未曾有の災害について、その端の方で、私も実際に遭遇したのだが、私がそれまでに聞いた大地震は、関東大震災のことであつた。何でも、母が、産まれたばかりの赤ん坊を抱えて、外へ転び転び逃げ出したといふ話、そして、夜は恐ろしさのあまり、竹やぶの中に蚊帳を吊つて寝たといふこと、そして、近所の家が何軒かぶれてしまつたといふこと、いつも聞かされたものである。

しかし、この関東大震災というものについては、その恐ろしさを想像するだけであった。

それでも、何度も大きな地震に遭うと、いつも関東大震災との比較で語られるのであつた。「あの時は、とてもこんなのは違つて恐ろしかつた。歩くことも立つていることもできなかつた。」と。

しかし、今回の東日本大震災は、それを上まわる大きなものだつたようである。

私は、或る程度の大きな地震に遭うたびに、いつも思い出すことがある。

彫刻家 中島 瞳雄

東日本大震災という未曾有の災害について、その端の方で、私も実際に遭遇したのだが、私がそれまでに聞いた大地震は、関東大震災のことであつた。何でも、母が、産まれたばかりの赤ん坊を抱えて、外へ転び転び逃げ出したといふ話、そして、夜は恐ろしさのあまり、竹やぶの中に蚊帳を吊つて寝たといふこと、そして、近所の家が何軒かぶれてしまつたといふこと、いつも聞かされたものである。

しかし、この関東大震災というものについては、その恐ろしさを想像するだけであった。

それでも、何度も大きな地震に遭うと、いつも関東大震災との比較で語られるのであつた。「あの時は、とてもこんなのは違つて恐ろしかつた。歩くことも立つていることもできなかつた。」と。

しかし、今回の東日本大震災は、それを上まわる大きなものだつたようである。

私は、或る程度の大きな地震に遭うたびに、いつも思い出すことがある。

いのちの感受性

芹沢俊介

三月十一日に起きたこと、それ以後に起きたことについて、この間、感じたこと、考えたことの一端を記してみたい。

明らかになつてきたことで重要なことの一つは、地震と津波による災害と原発事故はおよそ本質を異どするということ。原発事故を大震災の一角に、同じ自然災害として位置づけることはできないということ。前者は自然がもたらした災害であり、自然灾害はどれほどひどくとも、過ぎ去ればすぐに現地に人が現れ、そこから暮らしの復興が始まる。

それに対し後者の場合、事故後二ヶ月半、現場から半径三十キロ圏にはいらない。直径六十キロにわたり展開されている光景を想像してみよう。たとえば、東京駅発の東海道線が横浜を過ぎ、茅ヶ崎に着くまでの所要時間は一時間弱、距離は五十八・五km。この間、家屋があり、工場があり、畑があり、川があり、日は照り、木々は緑で輝いている。なのに、人間のいとなみをどこにも見ることができない。無人なのである。これは信じがたいほど異様な光景である。

何が起きたのかはわかった。これほどのことをもたらすことができるものは、唯一、核という元来自然にはないものが、人間の力では制御不能に陥った事態だけである。

絶滅の脅威 *Great of annihilation* という言葉は、英國の児童精神科医 D・ウェニコットの本の中にある。胎児および生まれ間もない赤ちゃんおよび生まれ間もない赤ちゃんは、絶対依存の状態にある。絶対依存の状態を無条件で受けとめること、それが母親としての最早期の課題である。では絶対依存状態をしっかりと受けとめてくれる受けとめ手が現れなければどうなるか。そのとき子どもは、絶滅の脅威にさらされると、自分が母親としての最も重要な役割である。それは、絶対依存の状態を無条件で受けとめ手が現れなければどうなるか。そのとき子どもは、絶滅の脅威にさらされると、自分が母親としての最も重要な役割である。それは、絶滅の脅威にさらされると、自分が母親としての最も重要な役割である。

しかし、どんな事態に私たちが置かれているのか、という点についての意味がつかめそうにない。そんな思いに駆られて、ようやく出合ったのが「絶滅の脅威」という言葉である。絶滅の脅威をもつて露出してきたのが、これが、この度の原発事故ではないか。

絶滅の脅威 *Great of annihilation* という言葉は、英國の児童精神科医 D・ウェニコットの本の中にある。胎児および生まれ間もない赤ちゃんは、絶対依存の状態にある。絶対依存の状態を無条件で受けとめること、それが母親としての最早期の課題である。では絶対依存状態をしっかりと受けとめてくれる受けとめ手が現れなければどうなるか。そのとき子どもは、絶滅の脅威にさらされると、自分が母親としての最も重要な役割である。それは、絶滅の脅威にさらされると、自分が母親としての最も重要な役割である。それは、絶滅の脅威にさらされると、自分が母親としての最も重要な役割である。

同時に疑問も湧いてきた。それは、核兵器には絶滅の脅威をもたらすものとして銳く反応できるのに、原発には極端に鈍い（鈍かつた）のはなぜか、というものである。原子力の平和的利用とか原発は絶対に安全という支配や資本の側が洪水のようにあふれさせた神話のはたらきをその理由として指摘することはできる。けれど、それだけでは、事故が起こらなければ安全という常識以前の思考停止状態に陥ってしまった私たちの現実を批判的に取り出すことはできない。これに対しては今のところ全く平凡な考え方しかできない。すなわち核兵器が私たちの外に対象化されるのだ、とウェニコットは説いている。

絶滅の脅威とは、死の恐怖ではなく、もつと根底のいのちの存続がおぼえただしく大地震(おおなる)ふること侍りき。そのまま、世の常ならず。」

三月十一日、それはいつもと同じあたりきたりの静かな金曜日の午後だった。三時のおやつの支度をしていたそのとき、地震は何の前触れもなく、私たちの平穏な暮らしのひとこまに襲いかかった。それまで体験したことのない程度の揺れの強さと時間の長さから、今までとはけた違いの大地震であることを直感した。震源から数百キロ離れたこの神奈川県東部の震度は五程度で、幸い自宅にいた私と娘のユキに怪我はない、家屋の被害もなかった。だが間もなく、窓の外では津波警報を告げる防災無線や、警戒を呼び掛ける消防車のサイレンが驟然と鳴り響き始めた。テレビ画面が映し出した東北地方沿岸を襲う巨大な津波の映像に、私はユキを抱きしめたまま茫然と立ちつくしていた。相模湾に出された津波警報は、その後大津波警報へと切り替えられた。町

「共育ちカシガル」日記

(13) 母親たちの震災

東日本大震災で被災された皆様へのお悔やみと、被災された全ての皆様へのお見舞いを謹んで申し上げます。

付近のパトロールなどの任務に就いたため、連絡も取れぬまま翌日の昼過ぎまで帰宅しなかった。その夜私は、海岸からわずか三百メートルしか離れていない自宅マンションの中で、事態を呑みこめず不安げな面持ちの娘と二人、時折鳴り響く緊急地震速報の着信音に怯えながら長い長い一夜を過ごした。同じマンションの上の階に住むママ友のAさんが「いつでも避難してきて」と声を掛けてくれた。彼女の夫もまた、首都圏の帰宅難民となっていた。

翌朝、テレビで改めて被災地の惨状を知り、あまりの衝撃で言葉が出なかつた。夢を見ているようだつた。何も考えられなかつた。

被災を免れた私の町でも、震災の影響が表れるのに時間はかからなかつた。まずガソリンが買えなくなつた。スーパーやコンビニから食料品や生活用品が姿を消していった。原発事故や計画停電が混乱に拍車をかけた。様々なデマも飛び交つた。買いたくても物が買

頭がぐらぐらするほどの揺れである。机の脚にしがみついた。スマトラ地震の三ヶ月後の大余震のことがチラッと頭をよぎった。とても苦しい。そこで眼が覚めた。

いま、この大震災に出会って

仙道 富士朗

久月が過ぎた
しかし、私の東
日本大震災は大
きくなるばかり

いま、この大震
前山形大学学長

自然は克服で
きる対象などで
なく、その懷
に抱かれて人間
が生かされてい
る存在であるこ
とをあらためて
実感させられた。
科学の粹を集め
たはずの原発は、
もちろん崩れ去り、地球を、そし
てそこに住まいするすべてのもの
に障害を与えつつある。
自分自身を告発しているのだが、
「自然を克服して、豊かな生活を
作る」などという傲慢な考え方の

行き着く先が原発であり、その結果としての原発事故による自然破壊であることをいま知るべきである。

世界で起こりつつあることを、常にしつかりと理解していなければならぬことを知らされもした。友達が送つてくれた講演会のビデオから、広島の原爆で燃えたウランは八百グラムであるのに、通常の原発一基が燃やすそれは年間一トンであることを教えられた。この事実をあらかじめ知つていたら、危険極まりないこんなものを許していたとは思えない。「知らなかつた」では済まされないのである。

原発事故が出口の見えない状況にある一方、行く先は途方も無く遠く、道のりは極めて難路続きではあるのだが、津波に飲み込まれた被災地の新たな歩みは始まつた。

「天罰だ。津波で我欲を洗い流す

のだ」などという、さる政治家の不遜極まりない発言にも関わらず、若者は被災地に足を運び、汗を流している。若者の助けに感謝する老人の姿もテレビに連日映し出されている。

私も何かしなければと思った。にわか覚えのフェースブックの「友達の友達は皆友達だ」という

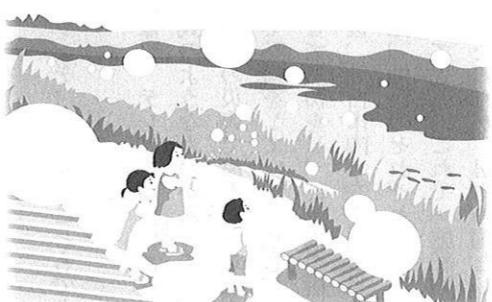
システムによる顔の見える人間のつながりにヒントを得て、フェースブックを利用している人間集団による被災地の支援を思いついたフェースブックを利用して金を集めようという発想ではない。募金者が募金の使い道をまったく追跡できない現在の募金システムの欠点を克服して、募金者が当事者としてプロジェクトに関わっていく新しいシステムを作れないかと思つたのである。募金によって行ったプロジェクトの進展を定期的にフェースブック上に報告し、募金者はそれをチェックし、意見を述べることによって、プロジェクトに参加していくのである。

ついているに相違ない子どもたちの心のケアに重点を置いたらと、

えない、電気も水も思うように使えない、車も出せない。そして株価の暴落や急激な円高などの経済の混乱。これから日本はどうなってしまうのだろう。高度経済成長の中に生まれ育ち豊かさを豊かさと気づかず漫然と暮らしてきた私たち世代。失いかけて初めて気づいたその豊かさが、いかに脆弱なものであつたのかを思い知らされたのだつた。

「命の尊さ、家族の暖かさ、人の糸水、食べ物、暖かい家。今まで私たちは本当に幸せだつたんだね。K」そんなとき、あるママ友からメールが届いた。「命があつて、家族がいて、雨風しげる家があつて。今でも十分幸せなんだよね。A」「被災地のことを考えよう。自分たちが出来ることを探そう。S」「子供たちの未来のために、前に進もう。M」ママ友たちとそんなメールを交わすうち、心細さで一杯だつた心中に、勇気の新芽のようなものが芽生えていくのを感じた。「子供たちの未来のために」という言葉は、いつの間にか私たちの合言葉になつていつた。

被災地への支援物資の受付が始まると、皆で呼びかけ合い、食品、紙おむつ、ペーパー類など、家にストックしてあつたうち半分以上を出し合い、ガソリンに余裕のある一人が車で会場まで届けた。誰一人、買いだめや買占め



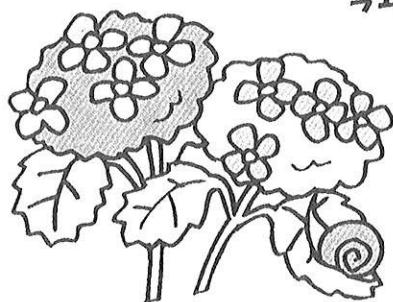
明るく夢のある未来をつないでいける
はずだ、そう確信した瞬間だった。
命を尊び、感謝し、絆を温めること。
そして未来に夢と希望を抱き続けるこ
と。今何よりも、そんな姿を子供たち
に見せていただきたい。

に走る者はいなかつた。程なくして、買い物に出るためのガソリンも店頭の商品も、ほとんど底をついてきた。私たちは徒歩や自転車で互いの家を行き来し、電池や米や紙おむつなど、足りないものを分け合つた。

放射能汚染が首都圏にまで及んでいるというニュースが流れた時は、私たちにも大きな衝撃が走つた。見えない放射能からどうやって子供たちを守ればいいのだろう？動搖している私たちに、Aさんがきっぱりと言つた。

「実は、沖縄の実家に避難するようになると周囲から勧められているの。でも私はここでみんなと頑張るよ。ここには大切な人たちとの絆がある。一人だけ安全なところに身をおいても、ちつとも幸せなんかじゃない。私が子供たちに一番伝えていきたいことだから。」

その言葉に胸が一杯になつた。私たちママ世代も、なかなか捨てたものじやない。この先どんな苦境に遭つても、この仲間達となら一緒に歩き続けていけるはず。そしてきっと、子供たちに明るく夢のある未来をつないでいけるはずだ、そう確信した瞬間だつた。



今年多くの方々のご協力を頂き、基準外職員確保のための

バザーを6月4日(土)に行います。ご報告は次号にて！！

来年度も6月に同様のバザーを行う予定です。

引き続きバザー物品のご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

～光の子どもの家 バザー実行委員会～

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2011年2月～3月

2011年2月現在

幼稚9名 小学生13名 中学生9名 高校生6名 措置外
4名 計41名

- 3日 節分の鬼が子どもたちの家に来る 小さい子どもたちは怖がりながらも果敢に豆を投げて鬼を追い払う
- 18日 東埼玉バプテスト教会の木田牧師による夕礼拝 感謝
- 24日 中学三年生の宗太と知香が無事に公立高校合格 受験勉強に目一杯励んできた二人の晴れやかな顔
- 25日 高校三年生の誠が大学に合格し中学三年生の宗太と知香が公立高校に合格したことをうけて全員で合格お祝い会 いつもより伸びた背筋と誇らしげな表情 受験まで共に伴走してきた職員も嬉しさを噛み締める
- 26日 聖学院大学の学生によるワーク 子どもたちと遊んでくださる 感謝
- 28日 小学校との連絡会 多くの子どもたちがお世話になっている小学校の先生方との情報交換の場 貴重なお時間を頂き感謝
- 3月
3日 小学校との連絡会 一人一人について丁寧な情報交換が出来た ご協力に感謝
- 11日 東日本大震災 光の子どもの家の子どもたち職員たちは皆無事だった 美季の高校の卒業式 震災の影響もあって夜遅くまで高校に待機しており職員が車で迎えに行く 忘れられない卒業式となった

14日 中学校卒業式 宗太と知香がそれぞれの思い出の詰まった中学校生活を終える 支えてくださった沢山の方々に心より感謝

19日 第13回出発（たびだち）の会 誠と美季がお世話になった方が多数集まってきた それぞの道に一步踏み出す彼らへ心からのメッセージと彼らからの返答のメッセージ 心より感謝
誠の高校の卒業式 震災の影響で延期された式だったがとても良い式だった
佑の幼稚園卒園式 元気いっぱいの兄貴分の卒園を笑顔で見守る

23日 丘実と奈美と要と美也子の小学校の卒業式 もうランセル姿はこれで見納めかと思うと嬉しいような寂しいような気持ち 光の子どもの家でもとりわけ元気な4人は4月に中学生になります

26日 第94回理事会 夕食会

☆日誌抄でもやっと2010年度を終えました 2011年度もどうぞよろしくお願ひ致します（洋）

＜2・3月の物品ご寄贈者様＞

セブンイレブン大利根北下新井店 株式会社ステラ 株式会社ニトリ 株式会社セカンドハーベスト 埼玉司法書士会 ハムコ会 株式会社カーブス 横村澄子 松川農園 金子太郎 小西恭子 松本明子 後藤利子 積真由美 富田農園 鈴木一夫 関口正一 羽部秀男 小田切末由美 他多数の御各位様

/// ————— 反 射 光 ————— //

☆梅雨の時期を間近に控え紫陽花の蕾が膨らんできました☆日々顕わにされる福島第一原発事故の深刻さともたらされた圧倒的な閉塞感を思い感じる時子どもたちの未来を考えにはおられません☆ここ光の子どもたちは福島第一原発からおよそ一九〇kmの位置☆目に見えない放射線の脅威にさらされながら生活するなどとは誰が予想し得たでしょうか☆大規模な震災に加えての未曾有の人災をどう受けとめるのか☆人間としての根源的な問題に突き当たつております☆子どもをみんなで守り育てるという生物の原初的な使命を日本全体で今一度見直す時機です☆更に三月十一日までに「孤族の国」「無縁社会」などの言葉に表される社会の有り様が私たちに投げかけていた問題が様相を異にして迫ってきたようを感じます☆行政では国から地方自治体への権限委譲により児童養護施設を含む多分野の財源が一括して自治体に委譲され用途はそれぞれの自治体が決定することに☆先行きが非常に不安である現在まずは最低基準の堅持を県に要望しております☆様々な問題に直面しながら私たちは子どもたちの利益をひたすらに追求し続けます☆今後もご支援を！

（洋）